棚尾地区まちづくり事業
平成28年7月21日（木）19時～
棚尾公民館3階

第５４回　棚尾の歴史を語る会　次第

1　前回までのテーマに関する参考意見
　光輪寺、棚小校門の沿革、まちの石積みなど

2　テーマ87「三栄座」
　説明（磯貝国雄）
　出席者による補足説明、感想など

3　テーマ88「笛の名手『老成三州』」
　説明（磯貝国雄）
　出席者による補足説明、感想など

4　テーマ89「棚尾の駐在所」
　説明（磯貝国雄）
　出席者による補足説明、感想など

5　連絡事項・情報交換など
　映像版　棚尾物語2　「棚尾の祭り」制作部会への参加依頼
　　7月28日（木）午後7時から
　　棚尾公民館

6　次回日程
　第55回棚尾の歴史を語る会　9月29日（木）午後7時から
　　テーマ：棚尾の歩み第1回　「江戸時代までの棚尾」

「三栄座」

1　要旨

明治から昭和にかけて、弥生町 3 丁目の八柱神社隣に劇場の三栄座があり、近隣市町村からの来客も多く棚尾の町は大いに賑わった。明治・大正時代は、近くで栄えた花街の客を主体として、演劇や浪花節などが興行された。又、花柳界の芸事の発表なども行われ、花街の中心となって繁栄した。

昭和に入り、この頃から大衆娯楽の中心となった映画の専門館に改装した。特に、戦後の昭和三十年代にテレビが普及するまでは、町の人だけでなく電車で来る客なども多く、活況を呈した。

2　花街の芝居劇場

⑴　三栄座以前の記録

寄席建設願

碧海郡棚尾村 248 番戸居住　平民永坂節太郎

仕儀　今般御規則ヲ遵守シ　碧海郡棚尾村 248 番戸ニ於テ　寄席建設支度候ニ付　別紙構造ノ絵図及近傍ノ略図相添此段奉願候也

明治 21 年 6 月 21 日

知立警察署御中

⑵　三栄座の開設

出典：写真集　三河を走って 85 年　㈱郷土出版社 1999 年発行

村芝居が好きなこの地に、明治 31 年、創業をみた劇場である。

⑶　施設

棚尾村字森下 2 番地

ア　当初

木造瓦葺平家　1 棟　此建坪　119 坪 3 合 3 勺　　8 間　×　14 間 5 尺 5 寸

附属　湯場：2 坪、厠：3 坪 5 合

所有者　斎藤徳太郎外 20 名

イ　改築　明治 36 年 6 月変更

木造瓦葺平家　劇場　1棟　此建坪　126坪5合　　8間　×　15間4尺

附属　湯場：2坪、厠：3坪5合

所有者

氏　　名	持分	氏　　名	持分
斎藤徳太郎	60 %	永井安太郎	1 %
小笠原忠太郎	10 %	小林安蔵	1 %
杉浦文治郎	10 %	金原徳平	1 %
中村長次郎	3 %	杉浦勘兵衛	1 %
榊原　和市	3 %	古久根辰蔵	1 %
斎藤宇三郎	3 %	斎藤嘉蔵	1 %
生田　照太	2 %	須田福太郎　西小椰新田	1 %
石川　新吉	1 %	石川笹次郎	1 %

⑷　明治時代の興行実態

ア　明治34年度　営業願届抜粋

金原徳平

棚尾村224番戸ニ於テ　34年9月18日ヨリ9月19日迄2日間最高木戸銭金3銭1昼夜1回ノ打切ヲ以テ滑稽にわか興行仕度候ニ付此段御届候也

小笠原忠太郎

棚尾村字森下2番地三栄座ニ於テ明治35年2月18日1日間最高木戸銭12銭場代ナシ明治35年2月19日ヨリ23日マテ5日間最高木戸銭金5銭場代4人詰60銭ニテ1昼夜1回打切演劇興行仕度候ニ付此段御届候也

イ　明治37年度　営業願届抜粋

申請者：斎藤徳太郎、中村長次郎、小笠原忠太郎、生田末吉

演目　：浮連節、演劇、漫才、手品、奇術

興行日数：1～3日間

⑸　棚尾劇場株式会社

明治35年に知立税務署から棚尾村役場へ「棚尾劇場株式会社」に関する照会文書があり、当時この名称が使われていたことが分かる。又、「棚尾劇場三栄座」の記述もある。

取締役社長：斎藤徳太郎

劇場貸料、敷地借料の科目名があるので、会社が興行主に貸し、敷地は借りていたことが分かる。

(6) 大正時代の様子

大正10年1月末現在における棚尾村の調査報告書によると次の通りである。

興行種別：演劇、活動写真、浪花節

常設非常設の区別：常設、定員：992

1～2月の興行実績

ア　浪花節　　入場料5銭、　演題「太功記」

イ　演劇　　入場料2銭、10銭、15銭、30銭、50銭

脚本及劇団：「実録小栗判官一代記」市川幡三郎一行

「蝶千鳥曽我実録」尾上梅葉一座

「国萃劇団」小泉一郎

ウ　活動写真　入場料10銭、20銭、30銭

映画名：「一弾のロス」「幡隋院長兵衛」「うすき縁」

エ　魔術曲芸　入場料20銭　　遊芸者名：萩廼家一行

オ　連鎖劇　　入場料20銭　　演題「国劇立志団」

(7) 昭和初期の様子

ア　花街芸妓の芸事の発表会である温習会が行われた。

イ　昭和7年人民願出届書綴

演劇興行届

碧海郡棚尾町字森下4番地　三栄座

一　演劇請興行　「活動写真」

一　課税標準　定員460名　木戸銭場代共　金15銭

一　自　1月4日　1日間

昭和7年1月4日

3　映画の繁栄

(1) 出典：加藤良平著「碧南の劇場」から抜粋

棚尾駅を降りた群衆が西へ、切れ目もなく列をつくってダラダラ坂を登って行く。道が平坦になって二つ目の交差点を左に折れると、目指す三栄座の入り口に突き当たる。映画の全盛時代を語る時、必ず話題となるのが三栄座で、客層は意外なほど多方

面にわたっていた。その大部分は平坂方面の客で、矢作川をまたいで電車で繰り出して来た。‥

専門の映画館になったのは、昭和12　13年の頃からで舞台の一部を改装してオーケストラボックスを作り、ピアノも備え付けてその形態を整えていった。客席を、ゴザを天張りした木製の長椅子に改造したのは、昭和17年である。当時の入場料は大人15銭、中人10銭、小人5銭。地蔵祭りや恵比寿講には3銭均一で開放したので、館内は身動きも出来ないほどの超満員であった。

三栄座が映画館として強い印象を残したのは、戦後、松竹、東宝、大映、日活の上映権を持ち、魅力作品を上映したからであろう。

朝鮮戦争が始まって、経済が立ち直りつつあった昭和27年、映画産業の未来はバラ色であった。座主は今までの座椅子を廃して、都市並みの一人椅子に改装して連夜満員の客を迎えた。

昭和35年経営者の斎藤叶は、株式を松栄館に譲渡、鵜飼清一の息。勝が支配人となった。ところがその年映画人口がピークに達したときで、その後、テレビの普及につれて客足は遠のいていった。昭和53年閉館、同じ年に新川キネマも廃業して、映画館が碧南から姿を消した。

(2)　昭和17年　常設劇場から常設映画興行場に用途変更の歎願書

同年4月に社団法人映画配給社が設立された。

笛の名手「老成(おいなり)三州」

1　要旨

老成（おいなり）三州は本名を斎藤昇一といい、源氏町 3 丁目に住んでいた、綿布商を営みながら、好きな横笛の勉強をし、昭和初年に東京へ出て、民謡界で全国的に活躍した。レコード会社から出された作品の中には、「棚尾節」「碧南木遣り節」など地元のはやしを取り入れたものも多くある。

2　人物紹介

⑴　出典：碧南事典

明治 40 年（1907）に棚尾の日影（源氏町）で、棚尾町の助役をしていた斎藤妙次郎の長男として生れた。本名を昇一といい、綿布商を営みながら好きな横笛の勉強をした。

昭和初年に東京に出て芸能活動を始めた。同志と共に老成社中を結成してその中心となり、弟子の育成にも力を尽くした。郷土の囃子を取り入れた「碧南木やり」「棚尾節」「志貴庄よしこの」など、多くの作品を手がけた。昭和 57 年（1982）に 75 歳で亡くなった。

⑵　出典：碧南文化　昭和 60 年 6 月

「郷土が誇る笛の名手　老成三州と碧南の民謡」　神谷暁子

笛が民謡の伴奏に用いられるようになったのは古く、太鼓に次ぐ歴史を持っている。元々は、祭囃子の連中が、盆おどりの踊り唄に加わっているうちに、独自の伴奏を作り上げたものだといわれている。ところが、当時の笛吹きの人は、自分の土地の唄だけ吹いていればよかった。それだけに各地の民謡の吹ける笛吹きの出現が待たれていた。

その中にあって、老成三州は貴重な存在であった。本名を斎藤昇一と言い、碧南市棚尾町の出身。大正 14 年笛一本を持って上京し、種々の困難にうちかって、戦後の民謡界にデビューした。そうして故人になるまで活躍された人である。それだけに民謡には、厳しい人だったといわれる。それでいて、声のささくれた人には、ささくれた音色の笛を吹くという、心の持主であった。

碧南には民謡はないとよく聞く。しかし、全く無いわけではなく、次に紹介するような郷土民謡が、彼の編曲によって残されている。

「碧南木遣り節」

三百年位前より唄い継がれている土搗唄の一種だといわれる。昔から神社仏閣の普請等には村中総出で地搗きをした。その時気を揃えるため声を揃えて唄ったものだといわれている。囃子は特色のある三河チャラボコの調子である。

「棚尾節」

碧南木遣りと同種の土搗唄である。特に囃子は祭礼に奉納する勇壮な旭流の神楽舞が基調になっている。

「志貴の庄よしこの」

昔、碧南地方は、荘園時代に志貴の庄の地名で呼ばれた。そこの有名な志貴毘沙門天に、奉祝されている木遣り節の中の「鴨川」を元にして座敷歌が生れた。

「笠づくし」

碧南地方は古くから三州瓦や、土器類の産地として有名。これらの職人や若い衆の仕事唄。又、矢作川の築堤工事の作業に唄われたものに、三味線の手を入れて座敷唄に仕立てている。

これらの民謡は、現在市内の民謡教室で、土地の唄として大切に唄い継がれている。中でも「笠づくし」は、碧南川崎会の会主川崎瀧一氏の唄で、三味線は石原ふさ子、鈴木志ずゑ、太鼓は高田謙、囃子、加藤悟と碧南市に在住の皆さんにより、ビクターでレコード化がされている。

笠づくし

一つ　人目の関所を越えて　（チョイチョイ）
　　逢いに来るのが忍び笠　（忍び笠ヅンドヅンド逢いに来るのが忍び笠）

二つ　深草、少将様は
　　小野の小町へ通い笠

三つ　見もせで　その逢いもせで
　　娘心は　想い笠

四つ　夜な夜なその角に立つ
　　人が通れば　かくれ笠

五つ　何時しかちょいと　なれそめて
　　心浮き浮き若衆笠

加賀のかがの町の笠やがのうて

殿の召すよな笠がない

5　ビクター音楽産業㈱　発行：日本の民謡　「愛知の旅」

	A　　面	B　　面
1	岡崎五万石	名古屋甚句
2	豊浜須佐踊り	笠づくし
3	碧南木遣り節（やれもさ）	設楽さんさ
4	志貴の庄（荘）よしこの	源氏神明
5	棚尾節（チンチロリ）	十四山音頭
6	平針木遣音頭（お木引き）	西尾節
7	名古屋名物	おさま甚句

⑴　碧南木遣り節

採譜・編曲　老成三州

唄　　高松　雄二

三味線　ばら田　芳三　　有本　やえ子　　青木　寿子

横笛　　浅利　参郷　　榎田　繁雄

太鼓　　老成　三州

鉦　　白瀬　春子

はやし　平松　明広　　榊原　保　　新浪　一二

〽東ナ　山カラ（ソコセ　ソコセ）

お出ある月わいの（アヨーイ　アヨーイ　ヨイ　ヨイ　ヨイ）

よいな　さんさ車の（車のさんさナンコナエー）

よいな　よいな（アヨイトモ　アヨイトモ）

アラ　まうごとく　ヤハレモッサイ

（ヤレモサ　オヤヤレ　オッサンソーズラ　エンヤラエー）

以下　はやし略

〽西はナ　亀崎　こちゃ　鶴ヶ崎

よいな　亀と鶴と　よいな　よいな

アラ　差し向いとや

乀南ナ　権現の　竜宮の灯り

よいな　誰が　とぼすか　よいな　よいな

アラ　毎晩さとや

乀北のナ　渡しで　毘沙門さまへ

よいな　嫁ご　婆々さと　よいな　よいな

アラ　連れ詣りとや

⑵　志貴の庄よしこの（今宵忍ぶなら）

唄　　岩崎　広子

三味線　ばら田　芳三

横笛　　浅利　参郷　　榎田　繁雄

太鼓　　老成　三州

鉦　　杉浦　伊一

はやし　白瀬　春子　　青木　博子

ハアー　イイトコダシタヨ（ヤーハレヌーケサノセー）

乀今宵忍ぶなら　蓑着て笠着て忍ばんせ

（アラナンゾイナ　アラナンゾイナ）

若しも誰だと問うたら　二十四孝の

筍堀りだとサ　抜けさのせ（ヤハレ抜けさのせ）

以下　はやし略

乀今宵忍ぶなら　丸の裸で忍ばんせ

若しも誰だと問うたら　どなたもお先に

風呂場はどこだとサ　抜けさのせ

乀今宵忍ぶなら　草履ヨふところで忍ばんせ

若しも誰だと問うたら　藤吉郎奴が

殿の迎えとサ　抜けさのせ

乀今宵忍ぶなら　逆出すとんぼで忍ばんせ

若しも誰だと問うたら　角兵衛獅子の

お宿戻りとサ　抜けさのせ

⑶　棚尾節（チンチロリ）

採譜・編曲　老成三州

唄　　高松　雄二

三味線　ばら田　芳三　　有本　やえ子　　青木　寿子

横笛　　浅利　参郷　　榎田　繁雄

太鼓　　老成　三州

はやし　平松　明広　　榊原　保　　新浪　一二

〽棚尾よいとこ　何日また来ても　（サン　ドッサイエー）

義理と人情のナ　（ソジャ　ヨーイヤナー）

花盛りノ　（チンチロリが　カンチロリンで　オーサ　ジョダ　ヤーラエー）

以下　はやし略

〽一夜権現の　唐傘松は

松は　枯れてもナ　名は残るノ

目出度目出度が　三つ重なれば

下の目出度がナ　重たかろ

〽雉子のめんどり　小松の下で

夫を呼ぶ声ナ　千代千代とナ

〽舟は新造で　乗りよいけれど

古木新造でナ　アカがさすナ

「棚尾の駐在所」

1　要旨

明治時代、町の治安を守るため、警察署の駐在所が設置された。棚尾には字志貴屋敷（後字中道に移転）と字中久根（後字田ノ崎に移転）に設置された。さらに、戦後の碧南市警察の時代には、棚尾小学校前で現在の郵便局の場所にも設置された。

2　碧南市における警察署の沿革

碧南市史から抜粋

西暦	和　暦	名称及び位置など
1875	明治 8 年 12 月	大浜村字浜家　第 14 巡査第 1 分屯所 所長 1 名所員 3 名 管轄地：現在の碧南市、旧明治村、現在の高浜市、旧高取村
1877	明治 10 年 2 月	改称　岡崎警察署知立分署第二大浜交番所
1877	明治 10 年 7 月	改称　岡崎警察大浜分署
1879	明治 12 年 12 月	改称　知立警察大浜分署
1886	明治 19 年 3 月	改称　西尾警察大浜分署
1886	明治 19 年 12 月	改称　知立警察大浜分署（戻る）
1887	明治 20 年 4 月	鶴ヶ崎駐在所新設
1887	明治 20 年 7 月	大浜町字別当に移転
1888	明治 21 年 4 月	鷲塚村と西端村に駐在所新設
1892	明治 25 年 4 月	棚尾村字志貴屋敷に駐在所新設
1896	明治 29 年 4 月	平七村に駐在所新設
1898	明治 31 年 4 月	新川町辻に駐在所新設
1899	明治 32 年 4 月	棚尾村字中久根に駐在所新設
1910	明治 43 年 8 月	新川町字西松江に駐在所新設
1911	明治 44 年 12 月	安城警察大浜分署

1924	大正 13 年 6 月	庁舎改築
1924	大正 13 年 8 月	大浜警察署に昇格
1924	大正 13 年 10 月	天王に駐在所新設
1948	昭和 23 年 3 月	新警察法施行　「碧南組合警察署」設立
1948	昭和 23 年 4 月	碧南市誕生　「碧南市警察署」に改称
1954	昭和 29 年 7 月	警察法改正　「愛知県碧南警察署」に改称
1961	昭和 36 年 7 月	碧南警察署が松本町へ新築移転
1993	平成 5 年 12 月	碧南警察署の現在の庁舎が完成

3　棚尾の駐在所

(1)　志貴屋敷駐在所

ア　当初　明治 25 年 4 月 1 日開設　字志貴屋敷に新設

イ　移転　字中道 17-4　35 坪　建物　2 棟　19.7 坪

明治 41 年の台帳から載っている。

字中道 17-2　82 坪

明治 44 年の台帳から載っている。

ウ　火の見やぐら建設に伴なう移転

大正 12 年　竣工式における工事報告

「大正 11 年 11 月 15 日　駐在所ヲ移転シ　茲ニ位置ヲ定メ　12 月 8 日ヨリ工事ニ着手……　」

エ　町制移行許可申請書の中の記事　大正 12 年

駐在所　字中道　1 棟　21.25 坪

(2)　中久根駐在所

ア　当初の場所　明治 32 年 4 月 1 日開設

場所　字中久根 6, 7, 8, 9 合併地

建物　主建物　　木造瓦葺平家 1 棟　間口 2 間 3 尺　奥行き 5 間 3 尺

此建坪 13 坪 7 合 5 勺

附属建物　木造瓦葺平家 1 棟　　間口 1 間　奥行き 3 尺　此建坪 5 合

合計　　建物 2 棟　14.25 坪

イ　移転年月日　　大正 2 年 12 月 1 日

場所　字田ノ崎54-1　宅地　114坪

建物　主建物　　木造瓦葺平家1棟　間口5間　奥行き4間

玄関　間口1間5合　奥行き1間

庇　　間口1間　　奥行き2間5合

此建坪24坪

附属建物　木造瓦葺便所　1棟　間口1間　奥行き5合　建坪　5合

合計　　建物2棟　24.5坪

(3)　春日駐在所

字春日8番地　2畝2歩

大正6年　学校試作地

(4)　昭和27年6月20日　碧南市廣報の記事

財産の現在高　建物

新川駐在所	6ヶ所	建坪数	135.50坪
大濱駐在所	3ヶ所	建坪数	54.00坪
棚尾駐在所	4ヶ所	建坪数	86.30坪
旭平七駐在所		建坪数	20.75坪
旭鷲塚駐在所		建坪数	27.50坪
旭二本木駐在所		建坪数	28.64坪

(5)　碧南警察署への聞き取り

昭和27年8月21日　屋敷、中久根、春日、平七の4駐在所を棚尾（屋敷）に統合する。